研究成果の紹介

1　イチジク「桝井ドーフィン」の超密植による早期成園化

ねらいと成果

イチジクは、通常植え付けから４年程度で成園化するが、成園化までの期間を、超密植によって１～２年に短縮し、さらに「野菜感覚」で取り組めないか検討してきた。その結果、栽植間隔0.8×２mの超密植にすることによって、定植２年目でほぼ成園並みの収量を達成した。

内　容

１　栽植方法と整枝法

一文字整枝法では、標準として列間２～2.2m、株間４～５mで定植されている。本試験では列間については、作業性と、下位節の着色向上のため、一文字整枝法の距離をそのまま確保し、株間を狭める方式（0.4m、0.8m、２m、慣行４m）を検討した。また、面積当たりの結果枝本数（主枝１m当たり５本）、新梢管理などは慣行どおりとした。整枝法は、２m区では一文字整枝法であるが、0.4m、0.8m区では主幹だけの株仕立てとした。

２　超密植樹の生育

新梢の生育は、３年目になって0.4m区で枝が長大になり、副梢の発生も多く、樹勢が強かった（表１）。次いで0.8m区であり、樹齢を重ねるに従って樹勢が強くなる傾向にある。今後さらに過繁茂傾向が強くなれば、果実の糖度、着色などに影響する可能性がある。

３　超密植樹の収量及び果実品質

栽植後、３年間の合計収量は0.8m区が最も多く、２年目で10ａ換算収量約2.8tとなり、ほぼ成園並みの収量（約３t）が得られた。３年目にも同様の収量が確保できており、慣行区（株間４m）に比べて２年目で3.5倍、３年目で1.9倍となった。0.4m区では、栽植１年目で成園時の枝数となるが、若木で下位節の着果が少ないため、収量は成木の１／７程度であり、２年目以降も収量は0.8m区より劣った（図）。

0.8m区の果実重は、成木と比べると小さいが、慣行区との差はなく、３年目には慣行区よりやや大きくなった。着色、糖度も慣行区に比べて大差はなく、成木と比べると、１年目、２年目は糖度がやや劣ったが、３年目には成木との差も徐々に小さくなってきている（表２）。

今後の課題

１　強樹勢のコントロール

２　若木の着果増による収量安定化

真野　隆司（農業技セ・園芸部）

表１　栽植間隔がイチジク（3年生）の生育に及ぼす影響

栽植間隔	結果枝数（本/樹）	枝長（cm）	枝元口径（mm）	副梢数（本/樹）
0.4m	2.0	142.8 c[1]	25.7 b	7.1 c
0.8m	4.0	140.3 c	25.0 b	5.7 b
2.0m	9.8	125.8 b	21.1 a	3.4 a
4.0m[2]	14.4	116.5 a	19.8 a	3.0 a

1）アルファベットの異符号間は5%水準で有意（Tukey）
2）慣行の栽植間隔

表２　栽植間隔がイチジクの果実品質に及ぼす影響[1]

栽植間隔	果実重（g） 1年目	2年目	3年目	糖度（Brix） 1年目	2年目	3年目
0.4m	63.9 ab[2]	67.9 a	76.7 a	15.9 bc	16.6 a	15.1
0.8m	70.6 b	72.2 a	85.0 b	15.2 ab	16.4 a	15.3
2.0m	54.1 a	67.7 a	82.3 b	15.0 a	16.7 a	15.3
4.0m[3]	63.6 ab	72.0 a	78.3 a	16.2 c	16.7 a	15.6
成木[4]	82.4 c	84.2 b	101.1 c	16.2 c	17.5 b	15.8

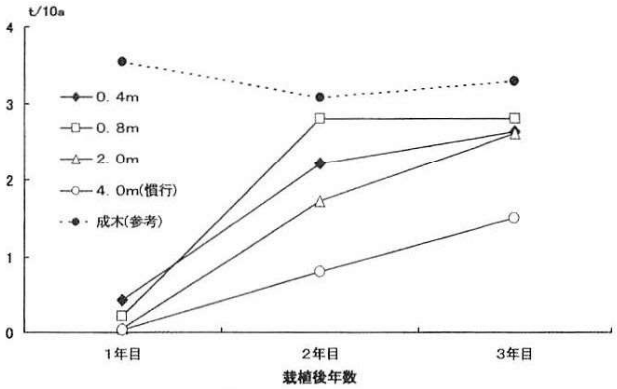

図　イチジクの栽植間隔と年次別収量との関係

1）データは2001～2003年
2）アルファベットの異符号間は5%水準で有意（Tukey）
3）慣行の栽植間隔
4）成木は参考（３年目で７年生）